**マードックはアガサ・クリスティがお好き？**

**マードックはアガサ・クリスティがお好き？**

**平井　杏子**

　カズオ・イシグロの資料を渉猟するうちに、ある作品のことを「アガサ・クリスティのパスティーシュ」と著者自身が打ち明けているのを知り、やがて気がつくと膨大なアガサのミステリー・ワールドに踏み迷っていた。

　この迂遠な道草でアイリスへの気兼ねがどこかにあったせいだろう、迷い道のそこかしこに、アガサならぬアイリスの姿がちらついて仕方がない。いったい、どうしたことだろう。だが、そもそも『スタイルズ荘の怪事件』（1916）でこの世に初登場したポアロは、ベルギー人の難民だった。第一次世界大戦時、アガサの故郷である南デヴォンのトーキーは、そんなベルギーからの難民であふれていたという。時代は下って第二次世界大戦後、ベルギーで難民救済の仕事に携わったアイリスが、世界的な名探偵ポアロの出自に関心を持つということは、大いにありそうなことだ。

　『ヘラクレスの冒険』（1947）というアガサの小説がある。ヘラクレスの１２の難行にポアロの活躍を重ね合わせた物語だが、ギリシア神話に因むそのタイトルが、書店でアイリスの目を引くという場面だって、あり得ないことではない。

　『ヘラクレスの冒険』では、エルキュール･ポアロのファースト･ネイムは、ギリシア語のヘラクレスであること、彼にはアシル、すなわちアキレスという名の弟がいたことが打ち明けられている。そういえば、『ジャクソンのジレンマ』のベネットの父方の祖父も古典の愛読者で、ふたりの息子に、ティマイオス、パトロクロスと名づけた。そして孫のベネットも、あやうくアキレスと命名されるところだったというではないか。

　アイリスはギリシアの神々の名を借用するのが好きだったから、偶然の一致なのだろうが、「やはり古典に親しんでおくべきだった……もっと若いころに……ああ、今となっては、もう手遅れだ……」という呟き、いかにもベネットの独白と勘違いしそうなこの台詞も、何と年老いたポアロが、オックスフォード大学の学寮評議員なる博士の、ギリシア語の詩の暗誦に耳を傾けつつ洩らす胸中の囁きだと知れば、いよいよアガサとアイリス、ふたりの関係に興味がわいてくる。

　もちろん、ジョン・ベイリーの回想やピーター・コンラディの評伝、その他もろもろのインデックスを検索しても、アガサ・クリスティの名は出てこない。アイリスは現代小説をめったに読まなかったというベイリーの証言すらあるほどだ。ましてやミステリーなど、ということだろうか。しかし、である。伝記や回想録というものほど、文学愛好者にとって重宝で楽しいものはないが、一方で、これほど胡散くさく、解読の足手まといになるものもないのである。隠されたものにこそ真実があるのではという懐疑を抱かない批評家は、たぶん文学、というよりは人間というものの底知れぬ不気味さ、いかがわしさに、いつも目をつぶっていられる好い人物なのだろう。

　そう、伝記といえば、一時期アイリスの私淑した、あの気難し屋のサミュエル･ベケットでさえ、執筆や舞台演出の合間の気晴らしにアガサ･クリスティを読んでいた、と伝記作家のジェイムズ・ノウルソンが証言している。一方ベイリーはと言えば、残念なことに何も語らない。晩年のある日、ベイリーとアイリスはケンジントンを散策する。ヘンリー･ジェイムズの家、ブラウニングの家、Ｔ，Ｓ．エリオットの家、サッカレーの家。ブルー・プラークをひとつひとつ確かめながら、先輩作家たちの偉業に思いをはせる。しかし、ほんのすぐそこのシェフィールド・テラスにもアガサの白い瀟洒な三階建ての家があって、壁にはしっかりとブルー・プラークがついているのに、どうやら気にもとめない様子。ふたりはケンジントン公園に足を踏み入れて、ラウンド池、サーペンタイン池をめぐってピーターパン像のところまでやって来るが、この道、ベケットやアガサの散歩コースでもあり、どちらの作品にもしっかりとピーターパン像が描かれている。

　じつはアガサ・クリスティ（1890‐1976）とアイリス・マードック（1919‐1999）、親子ほどに歳は離れているが、よく似たところがあるのだ。ふたりとも読書好きの少女で、信仰心に篤く、古典が好きで、やがて作家になると芝居にも関心を持った。声楽家を目指していたアガサも、歌手志願の母親の血を引くアイリスも歌がうまかった。神秘的なものや古代世界に憧れ、旅が好きで、ふたりとも川や海を見ると思わず飛び込んでしまうほど水が好きだった、などなど。なにしろアガサは、最初の夫アーチーと世界旅行に出かけたときには、海で遊びすぎて、ひどい火膨れを作ったほどだったのだから。

　一方、1956年にアイリスと結婚したジョン・ベイリーは、「私たちのハネムーンの主役は川だった」（『アイリスへの哀歌』）と回想している。新婚第一夜は、マーロウの川岸にあるアイザック･ウォールトンゆかりのコンプリート･アンギュラー・ホテルで、水音を枕に過ごすつもりだったのに、予約ミスで泊まれなかった。じつはここはアガサも気に入りの場所で、『茶色の服の男』（1924）では近くのミルハウスで男が殺されることになっている。

　アガサは1914年に、アーチーの両親の住むブリストルで駆け落ち同然の結婚をする。ここはトーキーへの経由駅なので作品にもよく出てくるが、『切られた首』が1963年にブリストル・オールドヴィック劇団によって上演されたのもこの場所で、アイリスの学んだバドミントン・スクールが近くにある。そして1919年、アイリスと同じ年に、アガサの一人娘が生まれる。『お気に召すまま』のヒロインの名に因んでロザリンドと命名されるが、ロザリンドは『ジャクソンのジレンマ』にも登場するように、アイリスにとっても大のお気に入りのキャラクターであった。

　アイリス夫妻は晩年、北オックスフォードの川の近くで暮らしたが、アガサは1930年に二度目の結婚をしたオックスフォード大学出の考古学者マックス・マローワンと、1934年からアガサが亡くなる1976年まで、南オックスフォードのウォリングフォードの川辺で静かな余生を送った。また先ほど述べたように、アガサもアイリスもロンドンのケンジントンで暮らしたし、戦時中に爆撃を逃れて一時期アガサが移り住んだハムステッドのローンロードのフラットからは、若き日のアイリスの愛人だったカネッティの家が目と鼻の先である。

　生涯のさまざまなシーンがこれほどまでに相似するふたりの作品が、どこか似ていたとしても不思議はないのかもしれない。先ほど名を挙げたヘンリー・ジェイムズは、アガサがまだ少女だった頃、トーキーの生家アッシュフィールド屋敷にしばしばやって来た。ジェイムズの影響は、アガサの作品のそこかしこに雰囲気のようなものとして感じられるが、『イタリアの娘』のフローラにも、絵画的な要素を抜きにすれば、『ねじの回転』（1898）の同名の少女フローラの面影が重なりはしないだろうか。『海よ、海』で、チャールズが書棚からたった一冊だけ手に取った本が、ジェイムズの『鳩の翼』（1903）だったことをふと思い出す。そういえば、アイリスのもっとも敬愛する作家の一人、ラドヤード･キプリングもまたアッシュフィールドの賓客の一人で、アガサは生涯にわたって彼に深い敬意を抱きつづけていた。

　もちろん、『海よ、海』のチャールズ･アロビーと、アガサの『三幕の殺人』（1934）の主人公で、これもまた同名のチャールズ･カートライトのあいだに、血脈めいたものを感じるのは、たぶん私の思い過ごしなのだろう。ふたりはいずれも、かつて演劇界で名を成した人物で、引退後のいま、世俗から離れて海の暮らしがしたいと、村はずれの高台に独り住んでいる。だがやがて、同じように激しい愛の妄執に捕らえられ、情念の虜となり、一人はまさに人を殺しかねないほどの歪んだ嫉妬ゆえに犠牲者を生み、もう一人はじっさいに殺人を犯す。

　コンラディは、『海よ、海』という題名の由来を、古代ギリシアの武将クセノフォンの『アナバシス』にあるとしたが、チャールズ･カートライトの「海、これに勝るものはない」という呟きには、『海よ、海』の訳者、蛭川久康氏の指摘のように、ヴァレリーの「海辺の墓地」が響きあう。『海よ、海』には、「最初にいた十三人が･･････」の歌が基調音として流れているが、アガサのもうひとつの海を舞台にした小説『そして誰もいなくなった』（1939）の「十人のインディアン」の不気味なメロディーにいつしか取って代わるのは、これも私だけの幻聴と言えるだろうか。

　いったん、こんなふうに考え出せば、もはや妄念はとどまるところを知らない。たとえば、『召使たちと雪』というあの芝居、雪に閉ざされた人里はなれた館で、過去の罪に囚われた人びとが、連鎖的に殺人を犯すというあの仕掛け、1952年から今なお世界最長のロングランをつづけているアガサの『ねずみとり』の事件現場となる、雪に閉ざされた山荘を彷彿させはしないだろうか。

　『ジョアナ・ジョアナ』は、大学紛争と70年代の社会不安という背景を除けば、これもまたアガサの『評決』（1958）二幕目の舞台にどこか似てはいないか。ジェイムズ・ジョイスの『エグザイルズ』（1915）をも髣髴させるこの作品、二幕目の、亡くなった妻アニヤの不在が醸成する何ものかが、ジョアナ不在の舞台の緊張に重なり合うせいだろうか。いや、それだけではない。「正義」「愛」「信念」「忠誠」「憐憫」「慈悲」という語のもたらす、我執に囚われた不毛な観念という、アイリス的な主題が、ここには明確に示されているからにほかならない。もしもアイリスがこの芝居を観たら、「わたしは人間の世界をあるがままに見てきました」という、教授カールを糾弾するライザの言葉に、拍手を送ったことだろう。

　そのほかにも、『ブラック･プリンス』は、書き手自身が犯人であったという、掟破りのどんでん返しで世間をあっと言わせ、ミステリーの許容すべき一線を越えたと世界的な物議をかもした、かの有名な『アクロイド殺し』（1926）にインスピレーションを受けはしなかったかとか･･････。いやいや、もうこのあたりでやめて置こう。まさに牽強付会の説、我田引水との批難が集まることはわかっている。

　しかしアイリスは、たとえアナクロニズムと皮肉られようと、モダニズムに断固背を向け、小説本来のプロットや物語性の復権を目指しつづけた。世界一のベストセラー作家、文字通り世界一のプロットの達人アガサ･クリスティと比肩されることを、微笑みながら許してくれるだろう。たまにはこんな逸脱した読みから、肩の凝らない新しいアイリス･マードック読解の地平が開け、読者層が広がることを願っての一文である。どうかご寛恕を。

　しかし再度考えてみれば、〈記憶〉や〈認識〉の歪みをメイン・テーマとするカズオ・イシグロの文学が、アガサ・クリスティに何がしかの啓示を受けたということが本当だとすれば、なるほどアガサのミステリーは、〈記憶違い〉〈見違い〉〈思い違い〉から成り立つ誤謬にこそ謎解きの鍵があるのだから、それはいたって当然のこととも言えるかもしれない。そしてまた、マードックの〈自己認識の歪み〉という主題に、それが通底していくのも、まったく不思議なことではないのかもしれないのである。

　カズオ・イシグロの資料を渉猟するうちに、ある作品のことを「アガサ・クリスティのパスティーシュ」と著者自身が打ち明けているのを知り、やがて気がつくと膨大なアガサのミステリー・ワールドに踏み迷っていた。

　この迂遠な道草でアイリスへの気兼ねがどこかにあったせいだろう、迷い道のそこかしこに、アガサならぬアイリスの姿がちらついて仕方がない。いったい、どうしたことだろう。だが、そもそも『スタイルズ荘の怪事件』（1916）でこの世に初登場したポアロは、ベルギー人の難民だった。第一次世界大戦時、アガサの故郷である南デヴォンのトーキーは、そんなベルギーからの難民であふれていたという。時代は下って第二次世界大戦後、ベルギーで難民救済の仕事に携わったアイリスが、世界的な名探偵ポアロの出自に関心を持つということは、大いにありそうなことだ。

　『ヘラクレスの冒険』（1947）というアガサの小説がある。ヘラクレスの１２の難行にポアロの活躍を重ね合わせた物語だが、ギリシア神話に因むそのタイトルが、書店でアイリスの目を引くという場面だって、あり得ないことではない。

　『ヘラクレスの冒険』では、エルキュール･ポアロのファースト･ネイムは、ギリシア語のヘラクレスであること、彼にはアシル、すなわちアキレスという名の弟がいたことが打ち明けられている。そういえば、『ジャクソンのジレンマ』のベネットの父方の祖父も古典の愛読者で、ふたりの息子に、ティマイオス、パトロクロスと名づけた。そして孫のベネットも、あやうくアキレスと命名されるところだったというではないか。

　アイリスはギリシアの神々の名を借用するのが好きだったから、偶然の一致なのだろうが、「やはり古典に親しんでおくべきだった……もっと若いころに……ああ、今となっては、もう手遅れだ……」という呟き、いかにもベネットの独白と勘違いしそうなこの台詞も、何と年老いたポアロが、オックスフォード大学の学寮評議員なる博士の、ギリシア語の詩の暗誦に耳を傾けつつ洩らす胸中の囁きだと知れば、いよいよアガサとアイリス、ふたりの関係に興味がわいてくる。

　もちろん、ジョン・ベイリーの回想やピーター・コンラディの評伝、その他もろもろのインデックスを検索しても、アガサ・クリスティの名は出てこない。アイリスは現代小説をめったに読まなかったというベイリーの証言すらあるほどだ。ましてやミステリーなど、ということだろうか。しかし、である。伝記や回想録というものほど、文学愛好者にとって重宝で楽しいものはないが、一方で、これほど胡散くさく、解読の足手まといになるものもないのである。隠されたものにこそ真実があるのではという懐疑を抱かない批評家は、たぶん文学、というよりは人間というものの底知れぬ不気味さ、いかがわしさに、いつも目をつぶっていられる好い人物なのだろう。

　そう、伝記といえば、一時期アイリスの私淑した、あの気難し屋のサミュエル･ベケットでさえ、執筆や舞台演出の合間の気晴らしにアガサ･クリスティを読んでいた、と伝記作家のジェイムズ・ノウルソンが証言している。一方ベイリーはと言えば、残念なことに何も語らない。晩年のある日、ベイリーとアイリスはケンジントンを散策する。ヘンリー･ジェイムズの家、ブラウニングの家、Ｔ，Ｓ．エリオットの家、サッカレーの家。ブルー・プラークをひとつひとつ確かめながら、先輩作家たちの偉業に思いをはせる。しかし、ほんのすぐそこのシェフィールド・テラスにもアガサの白い瀟洒な三階建ての家があって、壁にはしっかりとブルー・プラークがついているのに、どうやら気にもとめない様子。ふたりはケンジントン公園に足を踏み入れて、ラウンド池、サーペンタイン池をめぐってピーターパン像のところまでやって来るが、この道、ベケットやアガサの散歩コースでもあり、どちらの作品にもしっかりとピーターパン像が描かれている。

　じつはアガサ・クリスティ（1890‐1976）とアイリス・マードック（1919‐1999）、親子ほどに歳は離れているが、よく似たところがあるのだ。ふたりとも読書好きの少女で、信仰心に篤く、古典が好きで、やがて作家になると芝居にも関心を持った。声楽家を目指していたアガサも、歌手志願の母親の血を引くアイリスも歌がうまかった。神秘的なものや古代世界に憧れ、旅が好きで、ふたりとも川や海を見ると思わず飛び込んでしまうほど水が好きだった、などなど。なにしろアガサは、最初の夫アーチーと世界旅行に出かけたときには、海で遊びすぎて、ひどい火膨れを作ったほどだったのだから。

　一方、1956年にアイリスと結婚したジョン・ベイリーは、「私たちのハネムーンの主役は川だった」（『アイリスへの哀歌』）と回想している。新婚第一夜は、マーロウの川岸にあるアイザック･ウォールトンゆかりのコンプリート･アンギュラー・ホテルで、水音を枕に過ごすつもりだったのに、予約ミスで泊まれなかった。じつはここはアガサも気に入りの場所で、『茶色の服の男』（1924）では近くのミルハウスで男が殺されることになっている。

　アガサは1914年に、アーチーの両親の住むブリストルで駆け落ち同然の結婚をする。ここはトーキーへの経由駅なので作品にもよく出てくるが、『切られた首』が1963年にブリストル・オールドヴィック劇団によって上演されたのもこの場所で、アイリスの学んだバドミントン・スクールが近くにある。そして1919年、アイリスと同じ年に、アガサの一人娘が生まれる。『お気に召すまま』のヒロインの名に因んでロザリンドと命名されるが、ロザリンドは『ジャクソンのジレンマ』にも登場するように、アイリスにとっても大のお気に入りのキャラクターであった。

　アイリス夫妻は晩年、北オックスフォードの川の近くで暮らしたが、アガサは1930年に二度目の結婚をしたオックスフォード大学出の考古学者マックス・マローワンと、1934年からアガサが亡くなる1976年まで、南オックスフォードのウォリングフォードの川辺で静かな余生を送った。また先ほど述べたように、アガサもアイリスもロンドンのケンジントンで暮らしたし、戦時中に爆撃を逃れて一時期アガサが移り住んだハムステッドのローンロードのフラットからは、若き日のアイリスの愛人だったカネッティの家が目と鼻の先である。

　生涯のさまざまなシーンがこれほどまでに相似するふたりの作品が、どこか似ていたとしても不思議はないのかもしれない。先ほど名を挙げたヘンリー・ジェイムズは、アガサがまだ少女だった頃、トーキーの生家アッシュフィールド屋敷にしばしばやって来た。ジェイムズの影響は、アガサの作品のそこかしこに雰囲気のようなものとして感じられるが、『イタリアの娘』のフローラにも、絵画的な要素を抜きにすれば、『ねじの回転』（1898）の同名の少女フローラの面影が重なりはしないだろうか。『海よ、海』で、チャールズが書棚からたった一冊だけ手に取った本が、ジェイムズの『鳩の翼』（1903）だったことをふと思い出す。そういえば、アイリスのもっとも敬愛する作家の一人、ラドヤード･キプリングもまたアッシュフィールドの賓客の一人で、アガサは生涯にわたって彼に深い敬意を抱きつづけていた。

　もちろん、『海よ、海』のチャールズ･アロビーと、アガサの『三幕の殺人』（1934）の主人公で、これもまた同名のチャールズ･カートライトのあいだに、血脈めいたものを感じるのは、たぶん私の思い過ごしなのだろう。ふたりはいずれも、かつて演劇界で名を成した人物で、引退後のいま、世俗から離れて海の暮らしがしたいと、村はずれの高台に独り住んでいる。だがやがて、同じように激しい愛の妄執に捕らえられ、情念の虜となり、一人はまさに人を殺しかねないほどの歪んだ嫉妬ゆえに犠牲者を生み、もう一人はじっさいに殺人を犯す。

　コンラディは、『海よ、海』という題名の由来を、古代ギリシアの武将クセノフォンの『アナバシス』にあるとしたが、チャールズ･カートライトの「海、これに勝るものはない」という呟きには、『海よ、海』の訳者、蛭川久康氏の指摘のように、ヴァレリーの「海辺の墓地」が響きあう。『海よ、海』には、「最初にいた十三人が･･････」の歌が基調音として流れているが、アガサのもうひとつの海を舞台にした小説『そして誰もいなくなった』（1939）の「十人のインディアン」の不気味なメロディーにいつしか取って代わるのは、これも私だけの幻聴と言えるだろうか。

　いったん、こんなふうに考え出せば、もはや妄念はとどまるところを知らない。たとえば、『召使たちと雪』というあの芝居、雪に閉ざされた人里はなれた館で、過去の罪に囚われた人びとが、連鎖的に殺人を犯すというあの仕掛け、1952年から今なお世界最長のロングランをつづけているアガサの『ねずみとり』の事件現場となる、雪に閉ざされた山荘を彷彿させはしないだろうか。

　『ジョアナ・ジョアナ』は、大学紛争と70年代の社会不安という背景を除けば、これもまたアガサの『評決』（1958）二幕目の舞台にどこか似てはいないか。ジェイムズ・ジョイスの『エグザイルズ』（1915）をも髣髴させるこの作品、二幕目の、亡くなった妻アニヤの不在が醸成する何ものかが、ジョアナ不在の舞台の緊張に重なり合うせいだろうか。いや、それだけではない。「正義」「愛」「信念」「忠誠」「憐憫」「慈悲」という語のもたらす、我執に囚われた不毛な観念という、アイリス的な主題が、ここには明確に示されているからにほかならない。もしもアイリスがこの芝居を観たら、「わたしは人間の世界をあるがままに見てきました」という、教授カールを糾弾するライザの言葉に、拍手を送ったことだろう。

　そのほかにも、『ブラック･プリンス』は、書き手自身が犯人であったという、掟破りのどんでん返しで世間をあっと言わせ、ミステリーの許容すべき一線を越えたと世界的な物議をかもした、かの有名な『アクロイド殺し』（1926）にインスピレーションを受けはしなかったかとか･･････。いやいや、もうこのあたりでやめて置こう。まさに牽強付会の説、我田引水との批難が集まることはわかっている。

　しかしアイリスは、たとえアナクロニズムと皮肉られようと、モダニズムに断固背を向け、小説本来のプロットや物語性の復権を目指しつづけた。世界一のベストセラー作家、文字通り世界一のプロットの達人アガサ･クリスティと比肩されることを、微笑みながら許してくれるだろう。たまにはこんな逸脱した読みから、肩の凝らない新しいアイリス･マードック読解の地平が開け、読者層が広がることを願っての一文である。どうかご寛恕を。

　しかし再度考えてみれば、〈記憶〉や〈認識〉の歪みをメイン・テーマとするカズオ・イシグロの文学が、アガサ・クリスティに何がしかの啓示を受けたということが本当だとすれば、なるほどアガサのミステリーは、〈記憶違い〉〈見違い〉〈思い違い〉から成り立つ誤謬にこそ謎解きの鍵があるのだから、それはいたって当然のこととも言えるかもしれない。そしてまた、マードックの〈自己認識の歪み〉という主題に、それが通底していくのも、まったく不思議なことではないのかもしれないのである。